

ち、研究の同意を得られた全ての患者を対象とした。ツムラ八味地黄丸エキス顆粒(医療用)(TJ-7)を6ヶ月間投与し、投与前と投与後で日本語版歩行障害質問票(WIQ)を測定する前後比較研究を行った。WIQはASO患者の生活の質の指標として一般的に認められている。

【結果】 全19例のうち、脱落例5例を除く14例23肢について検討した。平均年齢73.3±4.7歳。6ヶ月の内服により、WIQの項目のうち、階段スコア以外の痛みスコア、距離スコア、速度スコアの3項目で有意にWIQスコアの改善を認めた。また、WIQスコアの合計値の中央値は162.5点から308.0点に有意に改善していた。全ての患者でWIQの合計値は改善しており、14例中7例(50%)で100点以上の著明な改善を認めた。

【結論】 八味地黄丸は間欠性跛行を有する末梢動脈疾患患者のQOLを改善させる可能性が示唆された。

P2-33.

開放性眼外傷の患者背景と予後についての検討

(眼科)

○水井 徹、馬詰和比古、村松 大弐
後藤 浩

【目的】 当院における開放性眼外傷の臨床像と治療成績を検討する。

【対象と方法】 東京医大病院で診断、治療した開放性眼外傷44例45眼について、診療録をもとに後ろ向きに検討し、患者背景、治療法、視力予後などを調査した。

【結果】 平均年齢は59歳。鋭的損傷は12眼、鈍的外傷による眼球破裂は33眼で、うち55%に内眼手術の既往があった。受傷原因は転倒が28眼と最多で、労災該当が10眼であった。治療は創の縫合のみが30眼、一期的硝子体手術11眼、眼球摘出2眼、角膜移植1眼で、視力はlogMAR 2.3から最終的に1.3まで改善したが、光覚なしも22%であった。治療後の平均視力は、鋭的外傷のlog MAR 0.09に対して鈍的外傷は1.82にとどまった。

【結論】 鋭的眼外傷は鈍的外傷による眼球破裂と比較して視力予後が良好であった。

P3-34.

地域在住高齢者の目的別の外出と主観的健康感の関連～5年間のコホート研究～

(専攻生：公衆衛生学)

○片岡 葵
(公衆衛生学)

菊池 宏幸、小田切優子、高宮 朋子
福島 教照、井上 茂

【目的】 高齢者の外出は多様な健康指標と関連するが、外出を目的別に捉えた研究はほとんど認められない。本研究は地域在住高齢者を対象に、目的別の外出と主観的健康感の関連を縦断的に明らかにする。

【方法】 ベースライン調査は、国内3都市の住民基本台帳から無作為に抽出した65～74歳2,700名に質問紙を郵送し2,045名から回答を得た。5年後に追跡調査への同意があった1,314名に質問紙を郵送し979名より回答を得た。分析対象者はベースライン調査で身体機能制限がある者、主観的健康感の低い者(SF-8の全体的健康感の項目で4点以上)、就労者等を除外した409名である。1週間における外出頻度は中央値より「週6回未満/以上」に分類した。外出目的は、買い物、仕事・ボランティア、友人・知人の訪問、散歩・運動、趣味・地域活動の5種類の目的別に頻度を尋ね、「週1回以下/より多い」に分類した。主観的健康観はSF-8の全体的健康感の項目より「低群(4点以上)/高群(3点以下)」に分類した。追跡調査での主観的健康感を従属変数、ベースライン調査での外出頻度(1週間および目的別)を独立変数、年齢、居住地、同居人、教育歴、飲酒、喫煙、Body Mass Index、身体活動を共変量としたロジスティック回帰分析を行った。

【結果】 1週間における外出頻度が週6回未満であることと5年後の主観的健康感が低いことの間、男性では有意な関連は認められなかったが、女性では有意な関連が認められた(OR=2.43 95%CI: 1.17-5.22)。目的別外出について検討したところ、男性では、趣味・地域活動が週1回以下の群は、それより多い群に比べて主観的健康観が低い者の割合が高かった(OR=3.32 95%CI: 1.17-12.08)。女性は目的別の検討では有意な関連は認められなかった。

【結論】 地域在住高齢者において、男性は趣味・地